

◆八木健 選

～西野周次の句集『黎明』を読む～

一般的な句集は、一ページに二句から三句、大方は二句掲載というものが多い。また、句集に載せる句の選考は、著者自身もしくは所属結社の主宰などに依頼することが多い。

ところが、西野周次氏が編纂された句集『黎明』は、一ページに五句が配され、しかもそれらは全て、俳句大会などで入賞、入選した句や、月刊誌、新聞、文芸雑誌、会報誌などの投句欄で選ばれた作品で構成されている。つまりどの句も、数多の応募作品、投句作品の中から選び抜かれたものばかりである。およそ二十名余りの選者、俳人によって選ばれた作品なので、どの句も粒がそろっていて完成度が高い。

入選、入賞の履歴のある、選ばれし作品群から、一体どの句をとりあげるべきか。迷った挙句、既に著名な俳人や選者に選ばれた作品ということにせずに、私の視点で選ばせていただくことにした。

薔薇百花人それぞれに死生感

句集冒頭の一句である。いきなり胸にずしんとくる句だ。咲き誇る薔薇の花たち。この薔薇も、今は華やかに見る人を魅了しているが、その美しさはいつまでも続くという訳にはゆかぬ。花たちはそれに気づいているのかいないのか。薔薇も人間も、命あるものは、すべて生を終える時が来る。それは不変で一つの事実だが、死生観は人の数だけ花の数だけ様々である。

羽ばたきを見せざる迅さ秋燕

燕は、春に渡ってきて夏に子育てをし、秋に帰っていく。秋の燕には充実感がある。翼にも一段と力強さが加わる。羽ばたきが見えないほどだと表現して、その迅さを読者に実感させる。

練るたびに割るる人垣荒神輿

上五、中七までは、何のことか分からぬ。下五になって、ああ神輿のことかと謎が解けて分かる。とたんに、御輿と人の動きが動画となって見えてくる。

句の構成が巧みである。「荒御輿」も効いている。

オンラインばかりの授業青葉寒

コロナ禍においては対面授業ができずオンラインでの講義となった。青葉寒の季語が、人と人が触れ合えない、温もりのない状況をうまく象徴している。

黙すとは言葉待つこと渋団扇

親子か夫婦か友達か、返事を待っている時のその場の緊迫感がうまく表現されている。読者が状況をあれこれ想像して参加できるのがいい。

うかうかと生きて啜るや心太

「うかうかと生きて」には、生真面目に生きるだけでは疲れる、遊び心も大切なのだと思います。心太のように力を抜いて生きるのもいいじゃないかと。

ややこしき話は明日新走

何やら込み入った話になって、論争の決着がつかぬ気配。これは長くかかりそうだと皆が思い始めた時、一人が提案したのだ。「今日はこれくらいにしようや。その話は明日、新酒でも飲みながらにしよう」。新酒が、協議をいったん解散させる上手い口実になったのである。

じゃんけんのあいこが続き神の留守

じゃんけんのあいこが続くのは、決着をつけてくれる神様の不在、神の留守だからであるという理屈が楽しい。童心があり、遊び心がいい。

溺るるもよしコスモスの海ならば

なにかを褒める時には、マイナスの言葉を使う場合がある。否定的な表現で肯定するのである。この句もその類で、「溺れる」という言葉を使ってコスモスの海を賛美している。

気も新た積む雑学や今朝の冬

「今朝の冬」は立冬のこと。実に多くのコンクールや投句欄に挑戦を続け、数多の賞や選を得ながらも、なお気を引き締める作者である。

著者の西野氏は昭和二十四年、今は松山市となっている北条市生まれ。不動

産業と文芸の「二足の草鞋」を履いてこられた。俳句だけでなく、川柳や短歌も詠み、詩もおつくりで詩集も出版されている。

西野氏は、今回の句集を「文芸活動の一区切り」とされているが、句集のタイトル『黎明』には「夜明け」という意味もある。総括どころではない。次なる活動の始まりを予感させてくれるものである。

また、あとがきに以下の一文を見つけた。「結社に於いても、個人に於いても、俳句観は千差万別で各々独自です。それらを全否定するで無く受容すべきところは容認し、みずからの間違いを改める。そこから新境地が開けて来ると確信します」。

句集タイトルの「黎明」は、氏の生き方でもあるのだ。今、俳壇の世界も、大きく変わる前の小さな変化が起こり始めている。まさに俳句の世界にも黎明がなくてはならない。